



いずれは地元の神社に戻り、ふるさとの発展に貢献していきたいものと願っています



黒神 容良 さん

神道文化学部125期卒
東京大神宮 権禰宜



黒神さんはこんな学生でした！ 藤本 頼生 教授

黒神さんは大学時代に水上スキー部に所属され、学業とスポーツの双方とも真摯に取り組んでいました。ゼミではいつも小麦色に日焼けした姿で参加していたのが印象に残っています。また、黒神さんは曾祖父から四代にわたる院友でもあります。神職となって数年経ちましたが、これからも神社に参詣される人々と神々との縁を取り結ぶ「神取り持ち」として、大いに活躍し続けてもらいたいと思います。



私は、代々地元の神社に神職としてご奉仕する家庭に生まれました。幼い頃から祖父や父の「うしろ姿」を見ながら育ちました。「自分も地元の神社を守り伝えていこう。そのために神道について本格的に学ぼう、神職資格を取得しよう…」そんな思いから、神道文化学部への入学を決意したのです。

実際に入学してみると、学部では、他大学・他学部ではあり得ないような授業や実習が豊富に用意されていました。2年次から祭式の授業が始まります。笏の持ち方から拝の角度、ひとつひとつの作法の意味を、細かく丁寧に教えていただきました。

3年次、奈良県の春日大社において、一週間の実習をさせていただきました。とりわけ「奈良の大文字送り火」の慰霊祭奉仕は、まことに忘れがたい体験となりました。4年次には伊勢の神宮で実習させていただきました。神代以来の聖地の神々しさ、清々しさが、今も深く心に刻まれています。

大学で募集されている助勤奉仕についても、積極的に参加させていただきました。様々な神社での七五三奉仕、例祭の神輿渡御など、ここでも「現場」での有意義な経験を、数多く積み重ねることができました。

奉職に際しては、以前から結婚式をはじめとする日本人の人生儀礼に興味を抱いていたということもあって、神前結婚式発祥の神社である東京大神宮で御奉仕させていただくことになりました。東京大神宮では、年間600件に及ぶ神前結婚式が斎行されます。一生に一度の大切な儀式を、いつも精一杯のまごころを込めて奉仕させていただいております。

御祈禱の御奉仕では、神様と人々を繋ぐ架け橋の役割を肝に銘じて務めております。御祈願は、いつも一期一会です。初宮詣や七五三詣で御奉仕すると、親御さんからとても喜んでいただけます。まさに神職冥利に尽きる思いです。神札や御守等、授与品の管理も担当しております。参拝者が求めているものは、それぞれに違います。参拝者の思いに寄り添った、丁寧かつ臨機応変な対応を心掛けています。

東京大神宮の職員は、変わりゆく時代を真摯に受け止めながら、常に神様のことを思い、崇敬者・参拝者の方々のことを考え、日々前向きに行動しております。経験豊富な諸先輩方から頂戴した数多くの御教示を自らの糧として、いずれは地元の神社に戻り、ふるさとの発展に貢献していきたいものと願っております。

令和7年度 総合型選抜、神道学専攻科、別科神道専修（Ⅰ・Ⅱ類）入試日程

入試制度	出願期間(消印有効)	試験日	合格発表	入学手続期間(消印有効)
神道・宗教特別選考(Ⅰ期) 〔神社本庁包括下の神社〕及び〔神道系教団〕の後継者を対象とした入試です。	9/18(水)～9/24(火)	1次：書類選考 2次：10/20(日)	1次：10/9(水) 2次：11/1(金)	11/1(金)～11/11(月)
神職養成機関(普通課程)特別選考	9/18(水)～9/24(火)	10/20(日)	11/1(金)	11/1(金)～11/11(月)
公募制自己推薦(AO型) 〔神道文化学部でぜひとも神道文化・宗教文化を学びたい〕という強い意欲を抱く志願者を選抜します。	9/30(月)～10/4(金)	1次：書類選考 2次：11/10(日)	1次：10/23(水) 2次：11/20(水)	11/20(水)～11/27(水)
神道学専攻科 4年制大学を卒業した神職子女が、1年間で神職資格(明階検定合格、正階授与)取得を目指す課程です。	11/1(金)～11/6(水)	11/24(日)	12/4(水)	12/4(水)～12/11(水)
神道・宗教特別選考(Ⅱ期)〔夜間主〕 〔神社本庁包括下の神社〕及び〔神道系教団〕の後継者を対象とした入試です。	2/4(火)～2/7(金)	1次：書類選考 2次：3/2(日)	1次：2/19(水) 2次：3/12(水)	3/12(水)～3/19(水)
別科神道専修Ⅰ類・Ⅱ類 高等学校の卒業者が、神職資格を目指す課程です。	2/4(火)～2/7(金)	3/2(日)	3/12(水)	3/12(水)～3/19(水)

※出願資格や「入学試験要項」など詳しい入試の情報については、國學院大学ホームページをご覧ください。本学入学課(電話03-5466-0141)へお問い合わせください。志願される方は早めに「入学試験要項」をご確認ください。

神道・宗教特別選考を志望する方々へ

本学では、(1)神社本庁所属神社の神職、またその家系の子女で、継承者となる方々もしくは、(2)神道系教団所属者の子女で、将来、後継者となる方々を対象にして、「神道・宗教特別選考」という入試制度を設けています。詳細は國學院大学のホームページをご覧ください。

オープンキャンパス(渋谷キャンパス) 令和6年 8月3日(土)／4日(日)／24日(土)

※学年は取材時のものです。



この学部でしか学べないことがある

神道文化学部



もっと日本を。もっと世界へ。



國學院大學



笹生 衛 教授

日本考古学、日本宗教史

笹生先生はこんな先生！

ゼミ生
工藤 豪士 さん



笹生先生は宗教考古学を専門とされており、「自然災害」や「気候変動」をテーマに文理融合の学際的な研究も行われています。多角的な視点によるロジカルな授業によって、いつも知的好奇心を刺激されておりました。とても和やかな雰囲気のある先生で、学生一人一人に対する確かつ懇切丁寧な指導を行ってくださいました。

私は、日本の考古学と宗教史を専門としています。私の研究は、神祭りや神社の歴史を、文献と考古学の研究成果を結びつけ、さらに自然環境との関係を総合して具体的に復元し、その意味・背景を考えようというものです。私は國學院大學大学院を修了した後、公務員として遺跡の発掘調査と文化財の保護行政の現場に身を置く一方で、青少年教育施設の職員や博物館学芸員としても多くの経験を積むことができました。そこでの経験で得られた多方面への興味・関心が、私の研究の基礎となっています。現在は、日本列島の自然環境の中で育まれた神祭りの伝統を人類史のなかに位置付けられないかと試行錯誤を繰り返しています。

神道文化学部で私は、宗教考古学の講義と神道史学演習(ゼミ)を担当

しています。考古学の分野においては、日々、新たな発見が続いています。私の講義では、新たな発見と研究成果をできるだけ反映させ、写真・図面などを多用して神祭りや神社の歴史を最新の視点から具体的に見直すことができるように心がけています。ゼミでは、自然災害と神・祭りとの関係に焦点を当てたり、古墳や墳墓における埋葬の実態から死者の考え方を検討したりしています。そこからは現代社会における災害や死の問題を考えるうえで大きなヒントが得られると考えているからです。

大学での学びは、自らの興味・関心にもとづき、楽しみながら積極的に取り組んでみてください。それにより、皆さんが人生を歩むうえでの新たな道標が浮かび上がってくるはずです。

國學院大學や神道文化学部で学ぶことの楽しさについて

学びの道を歩み続けて行こうと思います



工藤 豪士 さん

神道文化学部 4年
奉職内定

工藤さんはこんなゼミ生！

ゼミ担当
笹生 衛 教授



工藤さんのゼミでの研究は、神宮における御饌殿祭祀を、祭りの構成の歴史的な変遷を細かく跡づけ、神の考え方の変化と、その背景を明らかにしたものです。彼の真面目で誠実な人柄を反映した優れた内容となっています。今後は神職として祭祀を実践しながら、研究も深めてもらいたいと思います。今後の大成を期待しています。

私は一般家庭の出身ですが、ご縁があって高校卒業後に伊勢の神宮研修所という二年制の神職養成機関に入学しました。そして卒業後、更に学びを深めるために、國學院大學へと進学しました。

神道系の大学は全国に二校ありますが、私が國學院大學を選じたのは神社実習生制度があるからです。この制度の魅力として、経済的な負担を軽減できることが挙げられますが、日々実際の祭祀の場に身を置くことができるという点も大きな魅力です。私は4年間、靖國神社に御奉仕し、祭典奉仕や神饌調理、紙垂・人形の調製等を行っていました。4年次の秋季例大祭では、天皇陛下からの幣帛を納めた唐櫃を担当させていただき、身に余るほどの貴重な体験をさせていただきました。

大学の授業の中で特に印象深かった科目は、3年次から始まる基幹演習(ゼミ)です。私が所属した笹生衛先生のゼミでは、神道だけではなく仏教に関する文献・遺跡、認知宗教学、更には

理化学的なデータを用いた学際的な研究を通して、祭祀の根底にある「神観」の変化、そして祭祀の意義について学びました。

神宮研修所を卒業して以来、伊勢の神宮の祭祀に興味を抱き続けてきた私は、笹生先生の多角的な視点による研究を参考に、「神宮祀官の神観の変化と御饌殿祭祀」をテーマとして研究を行いました。

卒業後の進路は神社への奉職か大学院に進学するかで悩みましたが、学問と実践との両輪が重要であると考え、神社に奉職させていただくことになりました。本校の名前の由来である「国学」、その礎を築いた本居宣長は、学問に重要なことは才能の有無ではなく、「年月長く倦まず怠らずして、はげみつとむることぞ肝要」であると述べています。

奉職後は神様と人との「仲執持」として励むことは勿論、神職のもう一つの使命である「祭祀の厳修」のために、学びの道を歩み続けていこうと思います。





大学での学びや助勤の経験を通じて、自分も神職として奉仕したいと思うようになりました



小山 美咲 さん

神道文化学部 4年
奉職内定

ゼミ担当
小山さんはこんなゼミ生！
小林 宣彦 教授



小山さんは、神饌をゼミ発表のテーマに選び、研究を進めました。神饌はさまざまなバリエーションがあるため、難しいテーマですが、小山さんは多くの事例を取り上げて、論文にまとめました。また、ゼミでは、伊勢の神宮へ調査合宿を行います。参加は任意ですが、小山さんは3年次と4年次に積極的に参加しました。今後の活躍を期待しています。



当初は神職希望というよりも、むしろ純粋に神道や神社に興味があり、その知見を深めたいと思い、神道文化学部で志望しました。國學院大學に入って勉学に励んだことや、実際に様々な神社様での助勤させていただいた経験を通して、自分も1人の神職として、神社で奉仕したいと思うようになりました。

大学生活の中で特に力を入れて取り組んでいたのは、青葉雅楽会での活動です。青葉雅楽会というのは、その名の通り、雅楽を学び、実践的に音を奏でるサークルです。コロナ禍中であったために、1、2年生の頃はあまり大学のキャンパスに行く機会もなく、サークルや部活などにも接する機会が少なく状況でした。そんな中、長期的に助勤に行かせていただいていた田無神社様にその旨をお話したところ、青葉雅楽会を紹介してくださいました。わざわざ私のために会員の方をお呼びくださったうえに、楽器に触れる機会も設けてくださりまして、その時に、今自分の生活の一部になっている筈と出

会いました。

筈どころか雅楽に触れたのも初めてでしたので、右も左もわからない状態からのスタートでしたが、その後、努力を重ねて練習を続けた結果、先輩方の引退後に筈のパートリーダーを任されることとなりました。パートリーダーとしては、不出来な部分もあったかと自省するところではありますが、パートリーダー達と会についての様々な事案を話し合ったことや、下の学年の皆さんの協力のおかげで、無事に学祭での公演を行うことができました。

卒業後は、神社実習で学ばせていただいた人と神との「仲執持」の役割を忘れないように、そして、人と人との関わりを絶やさずに大切に、新しいものを取り入れ、日々努力と工夫をしていきたいと考えています。

大学生ともなると自由度はものすごく高いですが、それと同時に責任が伴います。自分が何をしたいかをしっかりと考えながら、大学生活を楽しみましょう！



小林 宣彦 教授

神道史

ゼミ生
小山 美咲さん



一目、真面目で堅そうな先生に見えるかも知れませんが、その表情を変えないままに発する言葉はとても面白い先生です。小林先生のゼミでは幅広いテーマを扱っているため、どのような研究内容でも発表することができます。3年生から4年生になる際に、研究内容を再考することもできるような、柔軟性が魅力のゼミです。



私は栃木県の社家の長男に生まれました。子供の頃から考えることが好きでしたが、どちらかと言えば、歴史なことに偏っていたように思います。そのため、大学の専攻は史学科を選びました。大学卒業後、神道学専攻科に進んで神職資格(明階)を取得した後、大学院に進学しました。大学院では、古代における祭祀・神社・神職などについて研究しました。

博士号取得後は、実家の神社で神職として奉仕するようになりました。大学院で理論を学んだ後に、神社で実践を学ぶことになったのです。「祭祀の本質的な役割とは何か?」「何故、神社は古代から現代まで存続してきたのか?」「神職の果たすべき役割とは何か?」こうした疑問が自然に湧き上がり、自身の研究に大きな影響を与えました。そして、「災

害が多発する日本において、祭祀とは災害対策の一つであり、神社とは祭祀を行うための社会的施設である」という結論を導き得たのです。

神道文化学部の教員になってからは、祭祀の本質を伝える授業を心がけています。また、装束に関する授業も担当しています。令和の御大礼では、装束を着装する衣紋方として奉仕しました。神職が祭祀を行う際には、装束の着用が必須ですから、装束の知識や衣紋の技術を活かした授業を行っています。

神道文化学部には、さまざまな専門の先生方がいます。そうした先生方から多くの知識を得て、神社の実践に活かして欲しいと思います。理論と実践を兼ね備えた神職になることを期待しています。

祭祀の本質を伝える授業を心がけています



國學院大學の奨学金制度

※令和6年度分。社会状況の変化を踏まえて変更することがあります。

1年次は 全員支給	神道・宗教 特別選考新入生対象	返済不要 神職子女奨学金 …[1年次生] 自宅外通学者40万円/自宅通学者20万円支給(全員) …[2年次以上] 自宅外・自宅通学者ともに10万円支給(学業成績の上位20名以内)
夜間主学生対象 返済不要	國學院大學フレックス特別給付奨学金 ※令和7年度入学者より家計・成績要件等、条件あり	稲荷奨学金(伏見稲荷大社) 返済不要 ※条件あり
神社界からの奨学金	■神社本庁育英奨学金 返済不要 ※条件あり ■全国敬神婦人連合会育英奨学金 返済不要 ※募集されない場合があります	

詳しくは、大学ウェブページをご覧ください。

<http://www.kokugakuin.ac.jp/student/scholarship>





加瀬 直弥 教授

古代・中世神道史・神社史

加瀬先生はこんな先生！

ゼミ生
大須賀 弓菜 さん



私は3年生では授業、4年生からはゼミで加瀬先生に大変お世話になりました。加瀬先生は物事を筋道立ててお話されることに非常に長けていらして、授業内容の密度が濃いにも関わらず、とても分かりやすい説明をしてくれます。また、的確な指摘と共に、様々な分野の知見から新たな見解へと導く博識な先生であり、褒めて伸ばす面倒見の良さをお持ちの優しい先生です。

神社のまつりの時に神職が手にする笏。この笏は、元来、中級以上の役人しか持てない物でした。しかし、現在は神職のシンボルになっています。私の関心のひとつは、神職の社会的役割の変化に注目して、シンボル化の理由を考えることです。

神職が笏を持つきっかけはいくつもなく、神職が役人扱いされたからです。奈良時代末から平安時代初頭(8世紀末～9世紀初頭)にかけてのことです。ただその結果、神職は、公共性の高い仕事を義務化され、高潔な人格も求められるようになりました。

ところが、後の時代の神職はこうした負担や制約を受け入れず。むしろ、求められた人格を理想とし、義務であった境内の掃除も重視します。笏のシンボル化の過程と同様、その理由はまだ探る余地がありそうです。

今の話からでもご理解いただけるように、私の専門は、神社の神職やまつりの歴史です。現在の神社では、古い時代のまつりのかたちや考えを重んじます。しかし、「古いほど重要」ということでもありません。そこで、どの時代の何を重んじているのか、その理由とともに理解できれば、神社の将来を決める時の参考にもできます。主に担当している祭祀学では、そのための知識と応用法を取り扱っています。

ですが、他のアプローチで神社のことを考える学生の疑問には応じますし、現代の神社の実務についての授業を受け持つこともあります。「神道文化・宗教文化を広く学びつつ、関心のある分野を深掘りできる。」そういう神道文化学部の学びの場は大事にしたい。と思っています。

大学で手に入れた様々な出会いと学び



大須賀 弓菜 さん

神道文化学部4年
奉職内定

大須賀さんはこんなゼミ生！

ゼミ担当
加瀬 直弥 教授



元気なあいさつと明るい反応で、ゼミを良い雰囲気にしてくれた大須賀さん。一方で研究に対しては真剣でした。途中でテーマ修正に踏み切ったときには、基本的な文献を読み直すところからはじめましたが、最終提出前のチェックの段階で、すでに手堅い論文にまとめあげていました。その瞬発力・集中力にはただ驚くばかりです。



神道文化学部を選んだ理由は、宮司である父の跡を継ぐことが出来るよう資格を取得したかったためと、「東京」に住みたいという好奇心があったためです。正直なところ、神道そのものに対する関心は、入学当初はそれほど強いものではありませんでした。しかし、そうであったからこそ、逆に宗教を信仰する人の考え方には非常に興味がありました。そのため、大学で様々な授業を受講するようになるにつれて、神道も含め、宗教に対する人の捉え方の相違を知ること、徐々に面白さを感じていくようになりました。そして、学びを深めることで、神道もまた自身の重要な関心事の一つとなりました。

とは言え、3年生までは、どこことなく自身の知りたいことにたどり着けず、人にも聞けず、思考にモヤがかかっているように感じていました。

そんな自分にとって最も大きな転換点となったのは、4年生のゼミを担当してくださった加瀬先生が本を紹介してくださいました。私は、活字を読むことに苦手意識があり、レポートは常に悩みの種でもありました。先生が紹介してくださいました本は、まさに私が関心を持つ「宗教を信仰する人の考え方」に関するもの

であり、私がこれまで誰にも上手く尋ねることができなかった、長年の疑問点と真摯に向き合ってくれるものでした。活字に対する苦手意識は相変わらずあったものの、その本を読んでいる時は、いつも面白さで心が奪われていました。大学生活全体からすれば、ほんの些細なきっかけで、小さな出来事のようにみえるかもしれませんが、私にとっては自身の価値観を大きく左右する貴重な出会いでした。

ひとつ好きな分野が見つければ、その点から線へ、線から面へといくだけでも世界は広がるものだと思います。この大学で手に入れた様々な出会いと学びを大切にして、卒業後の私の世界を構築していきたいと思っています。

興味を持って行動すれば、人はどこでも輝けるものでしょう。レポートや課題に難儀してきた私ではありますが、そんな私にも國學院大学は学ぶ意欲を与えてくれました。この経験が少しでも、志願をお考えの方のご参考になれば幸いです。

皆さんが自身の世界を最も輝かせられる場所に行けるよう、心から願っています。

